

提出日：令和 3年 2月 15日

所 属： 獣医学部 獣医学科

氏 名： 野口倫子 職位：准教授

I ティーチング・ポートフォリオ

1. 教育の責任（教育活動の範囲）

獣医学科に所属し、専門科目である臨床繁殖学および養豚生産に関わる学問を中心とした教育・研究活動を行っている。主たる教育活動は、獣医学科学生を対象とした臨床繁殖学関連および養豚関連科目の担当、研究室生の研究指導、獣医学科5年次のクラス担任業務である。

科目名	学科・専攻	必, 選, 自	配当年次	受講者数
産業動物臨床基礎実習	獣医学科	選択	1V	約 140
獣医畜産管理学	獣医学科	選択	3V	約 120
獣医臨床繁殖学実習	獣医学科	必修	5V	約 140
獣医産業動物総合臨床	獣医学科	必修	5V	約 140
獣医産業動物臨床実習	獣医学科	必修	5V	約 140
総合獣医学	獣医学科	必修	6V	約 140
卒業論文	獣医学科	必修	6V	4

2. 教育の理念（育てたい学生像, あり方, 信念）

学生には、自ら疑問を感じて、それを解決するために積極的に行動できる人間になってもらいたい。獣医師として世の中に出た際には、明確な答えがあるような状況や、待っていれば答えが出てくる環境は極めて稀であり、それぞれが責任を持って難しい決断をして、問題解決のために物事を前に進めていく立場になる。そのため、受動的な教育を受ける機会の多い学生時代から、一つの課題についてまずは自ら考えるという習慣をつけ、間違いを恐れず発言・行動し、教員と議論することを反復させる能動的な教育を提供することは、学生自身の現在の知識やスキルの過不足を把握させた上で、問題解決のために足りない能力を自ら学ぶ必要性に気づかせることにつながる。

また、多様な働き方が選択できる世の中において、公私ともに充実した日常を送るためには、自身を律する力が重要な鍵となる。学生が、将来ワークライフバランスを重視した働き方を選択できる人間となるために、問題解決をした際の達成感や充実感を通じた獣医学的能力の向上意欲の促進だけではなく、時間管理能力や周囲との協調性を身に着けるような教育を提供していきたい。

3. 教育の方法（理念を実現するための考え方, 方法）

前述の教育理念を達成するために、①「自ら学習し、考えるという思考を身につける」②「事前に準備し、行動し、解決するという実行力を身につける」③「時間管理方法を身につける」という方針で教育を行っている。

①「自ら学習し、考えるという思考を身につける」

学部生教育では、講義や実習では基本的に教科書は使用せず、必要な箇所については自身で教科書等を用いて加筆するようにしている。

研究室生教育では、学生自身が担当する研究についての試験計画書作成に多くの時間を割いている。特に動物生体を用いる研究については、科学的根拠をしっかりと学んだ上で、研究の必要性について理解をさせている。

②「事前に準備し、行動し、解決するという実行力を身につける」

学部生教育では、講義や実習資料を遅くとも1週間前までに確認できるように準備している。講義内容には復習すべき箇所を盛り込んだ課題を入れ、「予習」「受講」「復習」を行ってから小テストや課題を受けるといった方式を採用している。実習では、基本的には学生が自身で作業し、考える時間を多く設けているが、教員は学生から質問がしやすいように巡回をしたり、教員から話しかけて問題解決をサポートしている。

研究室生教育では、学生自身が主体性を持って担当研究について管理を行っている。また、トラブルも含めた進捗状況に対し、現状がわかる資料を作成の上相談に来る形式を徹底している。

③「時間管理方法を身につける」

学部生教育では、講義や実習の出欠管理は事前に十分説明の上、厳格に対応している。特に開始時間については厳守している。

研究室生教育では、個人が担当する研究について、学生自身が研究活動の全ての時間設定を行っている。緊急的な相談については、教員に事前アポイントを取った上で随時打ち合わせを行うことを徹底している。

アクティブラーニングについての取組

- ・すでに終わっている講義科目に続く講義や実習では、復習をすべきポイントを明らかにし、小テストや課題にそのポイントを入れて学習効果を高めた
- ・提出課題については、複数の資料を確認・理解しないと完成しない課題を準備し、学習効果を高めた

ICTの教育への活用

- ・様々な学生の通信環境に配慮し、短時間の動画資料を複数使用した。
- ・配布資料は全てPDF化して講義・実習の1週間前までに学生が確認できるように配慮した。
- ・質問は複数の方法で適宜受付、可能な限り早急に対応をした。

4. 教育方法の改善の取組（授業改善の活動）

①教育（授業、実習）の創意工夫 (A)

講義科目では、対面式と遠隔式での理解度に差が出ないように、主要な配布資料の他に補足資料を複数準備し、学生の理解度向上に努めた。対面実習では、短時間で学生の学習効果があるように班編成や実習内容を工夫した。

②学生の理解度の把握 (A)

学生の理解度を把握するため、小テストで多くの学生が間違っていた箇所については、まとめて解説を行った。その問題は、回答番号を変えるなどして定期試験に出題し、その理解度向上を把握している。

③学生の自学自習を促すための工夫 (A)

学生の自学学習を促すために、講義の中で復習箇所のポイントを明示する、復習箇所を盛り込んだ小テストを実施する、レポート課題は自学学習が必要なものを準備するという工夫をした。

④学生とのコミュニケーション(質問への対応等) (A)

学生からの質問は、講義・実習中に質問しやすい環境を作るように配慮している。また、遠隔講義についての質問は、複数の方法で受け付けを可能とし、早急に対応するようにした。

⑤双方向授業への工夫 (B)

講義・実習双方において、複数の方法で学生からの意見を言える環境を整備している。実習については、対面式の実習時には学生と教員が直接話をする機会を多く設け、学生からの質問がしやすい環境作りに配慮している。しかし、講義科目はあまり学生からの反応がないため、より一層の工夫が必要である。

※A（十分実施している） B（実施しているが十分でない） C（うまく取り組めていない）

⑥国家試験対策としてどのような取組をしましたか。

5年生向けの講義・実習科目の中では、過去問を講義資料の中に入れることで、講義内容と国家試験問題の関係性を意識するようにしている。また、レポート課題では、過去問の解説を課題とすることで、自学勉強の中でも重要項目を強く意識させるようにしている。

6年生向けの講義では、担当する科目（豚病学）は国家試験の出題範囲が複数に渡っている（主に伝染病学、家畜衛生学および臨床繁殖学）ため、事前に各担当教員と打ち合わせならびに資料の確認を実施し、学生の理解がシンプルかつ容易になるように努めている。また、国家試験問題を複数講義内に提示し、重要なポイントを理解させるようにしている。さらに、個別に質問があったものについては、速やかに学年全体に質問内容と回答を共有するようにしている。

5. 学生授業評価

<p>①<u>授業評価の結果をどのように授業に反映させましたか。</u></p> <p>担当講義や実習の授業評価は、学部平均スコアを概ね上回っており、内容に問題はないと判断したため、基本内容は変更せずに適宜小さなアップデートをしている。</p> <p>② <u>①の結果はどうでしたか。</u></p> <p>今年度の前期実習科目は授業評価アンケートを実施していない。しかし、前期に行われた遠隔講義に対する学生アンケートにより、良い講義として複数の学生が臨床繁殖学実習をあげていることから、従来通りの内容を遠隔講義で伝えることに成功している。</p> <p>③ <u>②を踏まえて次年度はどのように取組みますか。</u></p> <p>学生の授業評価に特段問題はなかったため、来年度も同様の形で実施する予定である。アンケートの回収率を高める方法を検討中である。</p>
<p>6.学生の学修成果</p>
<p>① <u>学生の成績向上に資する取組を何か考えていますか。</u></p> <p>これを覚えれば試験の点数が取れる、という問題を作らないようにしている。担当科目は国家試験の CD 問題がメインとなるため、知識と経験の関係性を理解させるような実習を行い、その内容を試験とするようにしている。</p> <p>②教育活動によって得られた学生の成果及び学生・第三者からの評価</p> <p>学生からのアンケートにより、新規に学ぶところに加え復習すべきポイントがわかりやすく、学習効果が高かったとの評価を得ている。</p>
<p>7. 指導力向上のための取組 (FD 研究会参加状況)</p> <p>学内 FD 研究会に 4 回参加した。</p>
<p>8. 今後の目標 (理念の実現に向かう今後のマイルストーン)</p> <p>「自ら疑問を感じて、それを解決するために積極的に行動できる人間」の育成のために、まずは双方向授業への工夫を行い、学生からの授業評価や抱えている課題を正確に受信できるようにする。</p>
<p>9. 添付資料 (根拠資料) (※) 資料名のみ</p> <p>シラバス、配布資料、FD プログラムの参加記録、遠隔授業に関するアンケート結果</p>